

## 照し出される道

十月、正覚寺で、鴨井さんが、よそから熟柿をもらって来たが、紅いはずのものが、黄色がかつたり、灰色がかつたりして、気味の悪い嫌な色であった。柿の種類によるのだという話もあったが、そこへ坊が来て、柿のヘタを一つ取って「虫だ。蛆がいなあ」と言う。まこと白い虫がいる、初めて柿の虫を見た。時が時なので皆だまされるところであった。八月頃だと誰も虫熟れと知るが、柿の木熟れする時なのでだまされていたのだ。ちょうど年をとった人の虫熟れ念仏のように。

悲惨なのは年老いている人の、自力の虫に害せられたお念仏である。若い人ならば自力の虫もとれ易いが、永年、自力で通った人は、人の言うことも容易に耳に入らないし、自分でも気がつかないで、嫌な色を示し、悪い臭気の念仏をおし通そうとする。自力の虫が劫を経ると、教法の方をおしまげて自分に合わせる。

嘉祥は、無量寿経の「去来現仏仏相念」の文を釈するに当って、三世の諸仏は、念仏の法を以て化衆生の念あることを明して「光光相照又智智相照」と言った。

光光相照、智智相照とは、仏と仏との交渉を有難くも、明らかに示した文と受け取られる。

智慧は観知し、観照する。観知とは、観仏本願力の観で、信知と同一である。信心が本願力によつて成就することである。しかるに観照と言えば、その信心の智慧が浄土の莊嚴等を照し出すことである。観彼世界相の観である。

智慧は光る。そしてものを照し出す。照して尊いものを成就する。

人格の光輝というも智慧の輝きである。

真人格は必ず、又真人格を照し出すものである。人間に教育があるのはこの故である。したがって、真に人格が成立していない時には、真の意味に於ける教育道は成就するものではない。

光によつて他を照そうとするのが聖道自力であるならば、他の光によつて照されようとするのが浄土他力の世界である。

人はそれが未熟であればあるだけ、自分をぬきにして人をどうにかしようとする。社会をどうにかしようとする。そこに大望という野心がおこる。お恥しいほど未熟な、簡単幼稚な、ミミズの腹のような心しか持たない者が、社会的に大を為そうとする。そこには、無理があり、策略がある。未通るものではない。近ごろの多くの精神運動や、迷信運動がそのうちに尻尾を出し、崩壊するのはそのためである。皆、考えが聖道門的だからである。

一生涯「この自分を」問題として歩ませて頂くとところに浄土門がある。

私一人が聞く、私一人が求め、私一人が歩み、私一人が、照されて、照しきられて生きる道。それがぬきになると、真の念仏行者は無くなる。

松を作る人にならないで、一本の松になること。松を作ろうとする人はほとんどであるが、松になろうとする人は希有である。

わかりきったことではあるが、私は、「学問は親鸞の如く、事業は親鸞の如く、修養は親鸞の如く、信仰は親鸞の如く、念仏は親鸞の如く、伝道も親鸞の如くすべし。」と考えている。しかしあい濟まないことだらけである。

日蓮上人は、その遺訓の中に、日蓮が弟子たちは富士の裾野に一万ヶ寺の寺を建て、閻浮提第一の道場を造り、日蓮が弟子等は代々の帝の戒師となり、その檀那は左右大臣となつて、国政を掌中に納めよ、と言つたそうである。「王法は額にあてよ、内心には深く他力の大信心をたくはへよ」とのみ教、「小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもふまじ 如来の願船いまさずば 苦海をいかでかわたるべき」との御自証、何という、日蓮法華の徒との大きな違いであろう。

「仏の光明は是れ智慧の相なり。此の光明十方世界を照すに障碍有ること無し、能く十方衆生の無明の黒闇を除く。日月珠光の但空穴の中の闇を破するが如きには非ざるなり。」

如来の智慧光は、衆生の心内の闇を破つて下さる。そして

「彼の無碍光如来の名号は、能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満たすまふ。」

衷心の志願一切を満足させて下さるのであつた。

智慧光は照す、そして大信心を成就して大満足を与えて下さる。そこに、満された者の信心歓喜があり、やがてあふれ出て下さる報謝の念仏があり、生活がある。

自力の虫はこの智慧光に照らされることによつて死ぬる。如来のみ光より外に、この自力の虫を殺す力はない。この虫こそ、私を久遠劫来六道輪廻の病人にしていたのである。

自力の虫といつても、それは光ましまさぬ、照らし破られぬ相にほかならない。実体があるのではない。

実体のない自力無明から、実体のあるが如き輪廻の相が生れるのである。しかし輪廻の相も、また、日光の照さぬ間の霜の相に外なちぬ。

されば智慧光に照されること、それが生きることの最初であり最後である。

如来の光に照されるとは、世尊のみ教に照されることである。合掌してみ教に聞入ることは、そのままみ光に照されることである。み法を聞くことがみ光に照されることでないならば、それはみ法を聞いたのではない。聞其名号とは、み教を聞くことであり、信心歓喜とは、み光に摂取されることである。摂取の中に破闇と満願とがある。

自分で他を照し出そうとしても、それは不可能である。しかし、み光によって照し出されているものは、そこに信心の智慧を成就し、信心の智慧は自然に尊きものを照し出すであろう。

親鸞聖人はただ照されて生きた方であつた。しかし、その歩みの上に光る真人格の光輝は、やがて億々の念仏の人を照し出して下さつた。これ即ち本願の智慧光がそのまま聖人の信を通して輝いたのである。

三世の諸仏は、本仏の智慧光によつて、正覚を成就するのである。「無碍光明大慈悲斯光明即諸仏智」(二門偈) 弥陀は諸仏であり、諸仏は弥陀である。諸仏が悉く、本地法身の徳、本仏の光寿二無量の徳に住することによつて、諸仏たり得ることを憶ふ時、凡夫が何で、凡夫の力によつて、その真人格を成就することが出来ようや。

光るとは照されることである。照されずして光るものが、この世に有り得るだらうか。

念仏申す身は、世尊聖人の教えに会つて照され、念仏の人に会つて照され、善知識に会つて照され、念仏の声によつて照され、照されく、見るにつけ聞くにつけ、ただ照されて内に己が相の真実を見、その上に光る光明撰取の喜びを知る。

人を照そうとすな。照されく、て生きよ。

光光相照、智智相照、釈尊、龍樹を照し出したまい、龍樹念仏して世尊を照し出し、世尊やがて、天親を照らし、天親かえつて世尊を照らしたもう。世尊、龍樹、天親、曇鸞を照らしだし、曇鸞また世尊、天親等を照し出したもう。かくして、道綽、善導、源信、法然の上に、同一の相照が無尽にくり返されて、我が聖人に至る。聖人、世尊七祖に照されて、愚禿と合掌して念仏したまい、かえつて明らかに七高僧を照し出したもう。けだし三世の諸仏の、相念の境に、彷彿たるものか。

照されるものは必ず照す。大慈悲によつてやがて智慧に至る本願力廻向の世界の尊い哉。